保育内容に関する保育者のコンピテンシーの研究動向と課題

○　鹿児島純心女子大学　　井上　祐子（4758）

姜　民護（同志社大学・8570），高橋　順一（地域ケア経営マネジメント研究所・8413），

黒木　保博（同志社大学・979）

キーワード：保育内容，保幼小接続，コンピテンシー

１．研 究 目 的

経済協力開発機構(OECD)をはじめとする国際機関が,幼児教育や保育を表現する際,「Early Child-hood Education and Care」(ECEC)と表記していることからも明らかなように(OECD 2018),子ども達の教育とケア(保育)は切り離せるものではない.我が国においても子ども・子育て支援新制度は,幼児期における質の高い学校教育・保育提供を目的に,保育の仕事に教育機能を含む方向性を示している.また,保育所は児童福祉施設のひとつではあるが,保育所保育指針,幼稚園教育要領,幼保連携型認定こども園教育･保育要領との3法令において,3 歳以上児の保育に関するねらいと内容との整合性が図られ,「知識及び技能の基礎」「思考力,判断力,表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」といった保幼小接続を意識した幼児教育を新たに担うことが求められている.このように国内外において教育と保育の関わりが明記され,重視されている.しかし,幼児教育は,保育内容 5 領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)を中心に行われており,教科を中心とする小学校以上の教育と異なっていることから,幼児教育と小学校教育との接続には難しさがある.本研究では,教育と保育の関わりが重視されながらも,幼児教育と小学校教育との接続に難しさがあることを考慮し,保育者による保幼小接続につながる保育実践の一助となることを目指して,「成果を上げ続けることのできる行動特性」「再現性のある成果行動能力」「高業績者の行動特性を分析し,その能力から必要スキルを抽出し,評価に活用する」上で有効とされるコンピテンシー(能力評価の概念)に着目した.

そこで,本研究では,保育能力の向上及び保育の質の向上への示唆を得ることをねらいに,保育内容に関する保育者のコンピテンシーについて国内外の研究論文を整理し,今後の研究課題を明らかにすることを目的とした.

２．研究の視点および方法

研究論文の収集において,国内文献の検索には「CiNii」を用いた(検索キーワード:保育＆コンピテンシー).海外文献の検索には「ERIC」を用い(検索キーワード:Child Care ＆ competency),「Peer reviewed only」「Full text available on ERIC」との検索対象指定を行った.これらのデータベースから抽出された文献は,さらに次の①～⑥の選定基準に沿って分析対象の文献を絞り込んだ.その選定基準は,①重複文献は削除すること,②出典不明の文献は削除すること,③インタビュー,書評,報告書,エッセイ及び会議資料は除くこと,④保育者と保育専攻の学生を研究対象としていること,⑤幼児教育及び保育について検討

していること,⑥保育者のコンピテンシーについて検討していること,である.抽出された文献は,研究対象と方法,内容という側面から検討を行った.

３．倫理的配慮

倫理的配慮として「日本社会福祉学会研究倫理指針第 2 指針内容 A 引用」に基づき,先行業績の検討に際しては現著者名・文献・出版社・出版年・引用箇所を明示し,自説と他説との峻別を行った.

４．研 究 結 果[1]

国内の研究論文の検索結果は 20 件,海外の研究論文の検索結果は 16 件であり,合計 36 件が抽出された(検索実施日 2019 年 4 月 10 日).これら 36 件に対し,上記の①～⑥の選定基準に沿ってさらに文献の選定を試みた.その結果,保育者のコンピテンシーに関する研究論文として,国内の研究論文 6 件(高山 2008;入江 2011;岡田 2015;平田ほか 2016;中村ほか 2016;内田 2018),海外(アメリカ・デンマーク・フィンランド)の研究論文 3 件(Happo,et al.2011;Ryan,et al.2011;Aarkrog,et al.2015),合計 9 件を分析対象とした.その後,これら研究論文を研究対象,方法,内容という側面から検討した.まず,対象ごとに見ると,保育者を対象とした文献が 7 件(高山 2008;Happo,et al.2011 ; 入江 2011 ; Ryan,et al.2011 ; 岡田 2015;中村ほか 2016;内田 2018),保育専攻の学生を対象とした文献が 2 件(Aarkrog,et al.2015;平田ほか 2016)であった.次に方法ごとにみると,定性的研究 7 件(高山 2008;Happo,et al.2011;入江 2011;Ryan,et al.2011;Aarkrog,et al.2015;岡田 2015;内田 2018),定量的研究 2 件(岡田 2015;中村ほか 2016)であった.最後に,内容として,コンピテンシー理論 (高山 2008),コミュニケーション能力や対人関係行動等(Happo,et al.2011;岡田 2015;中村ほか 2016),ナラティブ能力(入江 2011),指導力育成プログラム,キャリア教育及び研修システム(Ryan,et al.2011;平田ほか 2016;内田 2018),運動能力,健康等(Aarkrog,et al.2015)に関する保育者のコンピテンシーについて先行研究が取り組まれてきたが,保育内容に関する保育者のコンピテンシーについて取り組んだ先行研究は見当たらなかった.

５．考 察

これまで保育内容に関する保育者のコンピテンシーについての研究論文では,定性的研究及び定量的研究はほとんど見当たらなかった.2020 年代から学習指導要領の全面改訂が予定される中,子どもの育ちは,幼児教育から小学校,中学校,高等学校まで一貫してとらえられ,幼児教育と小学校教育との円滑な接続が一層重視されている.今後,保育者に保幼小接続を意識した幼児教育を求められる中,幼児教育と小学校教育との円滑な接続の一助として,保育内容に関する保育者のコンピテンシーについて研究を蓄積していくこともまた,保育能力の向上,及び保育の質の向上への示唆を得ることをねらいとする上で,課題の一つとして考えられよう.

[1] 文献の詳細については，字数制限上，当日の資料に記す.